

「気」の慣用表現に関する研究(Ⅳ)

— “気が引ける” の意味用法を中心に —

戸 田 利 彦

1. はじめに

『感情表現辞典』(中村 明著 東京堂出版 1993)では、日本語の感情表現を、喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚の10類及びそれらの複合感情に分類し、それぞれの項目に感情を表す語句と表現を配しているが、“気が引ける”という語句は扱われていない。これと比較的類義性の高い“気が咎める”は語句として所収されており、‘厭’〔嫌・憎い・悔しい・困る・憂鬱・しょげる・苦しい〕の項目に分類されている。この項目に分類されている「気」の慣用表現は、“気に入らない”“気に食わない”“気が鬱する”“気が重い”“気が沈む”“気が咎める”の6例であるが、“気が引ける”も基本的にこの項目に分類されることになる。しかし、‘恥’〔恥ずかしい・晴れがましい・赤面〕の項目の〔恥ずかしい〕の要素もあるのではないと思われるのである。世間一般の常識や自己の実力の相対的評価を基準に、いわゆる‘でしゃばり行為’を恥と感じ自己の言動を抑制するというニュアンスも持つ点を考えると“気が引ける”には‘厭’の要素のみでは説明しきれない意味があるのではないかと、敢えて上記の分類に沿って言うならば少なくとも感情の要因として‘恥’の要素もあるのではないかという仮説を立ててみることから本研究を始めた。

そこで、本稿では、感情表現としての「気が引ける」を取り上げ、主要な辞書における意味の記述を確認した上で、実際の用例を整理し、意味用法の分析・記述の結果を報告することを目的とする。

2. 辞書における意味の記述について

ここでは、辞書における「気が引ける」の意味の記述を考察しておくことにする。

①『国語大辞典 第一版』(尚学図書編集部編 小学館 1981)

身にやましい感じがして気おくれがする。遠慮される。気がとがめる。*洒・多佳余字辞「気の引けて居るから、意地わるく、こりゃアしみに成ろうす」

②『広辞苑 第五版』(新村出編 岩波書店 1998)

気おくれがする。遠慮したい気持になる。引け目を感じる。

- ③『日本国語大辞典』（梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修 講談社 1994）

遠慮を感じる。気後れする。feel diffident

- ④『学研国語大辞典 第二版』（金田一春彦・池田弥三郎編 学習研究社 1995）

《句》引け目を感じる。気おくれがする。「ながい間、苦勞かけてすまんなんだァ
と言うのさえ一・けるよな心持でござります く字野千・おはん」

四つの辞書における意味の記述は、表現上の多少の違いはあるが、本質的には同じ
と言ってよかろう。要するに、「気後れ」や「遠慮」の感情を記述している。しかし、
それらの感情の前提としての“コンプレックス”や“罪悪感”の記述に関しては、③
と①②④では違いがある。すなわち、③はそれらの記述をしていないのに対して、②
④は「引け目」、①は「身にやましい感じがして」「とがめる」という表現によって、
それぞれ“コンプレックス”や“罪悪感”について記述している。しかしながら、こ
れらの記述は、「気」の表現を別の「気」の表現に置き換えることに留まっていたり、
感情の前提としての“コンプレックス”や“罪悪感”などとの因果関係が不明瞭であ
ったりと、必ずしも十分とは言えない。「遠慮」あるいは「逡巡」という気持ちを核
に、因果関係を整理し、より明確な意味の記述ができないであろうか。少なくとも
“世間一般の常識からの逸脱”“分不相応”“罪悪（加害、信頼関係の破棄）”という三
つの意識について要因としての言及がなされる必要があるのではなかろうか。

以上の考察を通して、「気が気でない」の意味の記述に関して次のような課題を指
摘することができよう。

- ①「気が引ける」という感情の要因として具体的にどのようなものがあり、それらは
どのように分類するとわかりやすいか。
②「気が引ける」という感情はどのようなものであり、またどのように分類するとわ
かりやすいか。

これらの課題を解決するために以下、用例に基づいて「気が引ける」の意味用法に
ついて分析を行う。

3. 意味用法の分析

3.1 意味 I

3.1.1 用 例

①彼はそれ等の自然よりも遥かに見すばらしい自然を愛した。殊に人工の文明の中に
かすかに息づいている自然を愛した。三十年前の本所は割り下水の柳を、回向院の広
場を、お竹倉の雑木林を、—— こう言う自然の美しさをまだ至る所に残していた。彼

は彼の友達ように日光や鎌倉へ行かれなかった。けれども毎朝父と一しょに彼の家の近所へ散歩に行った。それは当時の信輔には確かに大きい幸福だった。しかし又彼の友達の前に得々と話して聞かせるには何か気のひける幸福だった。(芥川龍之介『河童・或阿呆の一生』 新潮社 1968)

②少々子供っぽくて、友だちが遊びに来た時には気がひける、ディズニー漫画のキャラクターつきの洋服ダンスの前で、千津子は真直ぐに立ってみた。これは一種の儀式のようなもので、この鏡で確かめなくても、千津子のネクタイが曲がっていたり、長さがちぐはぐだったりすることは、まずない。少なくとも、千津子が高校二年になって、この半年間には一度もなかった。(赤川次郎『ふたり』 新潮社 1991)

③身内のことをあまり賞めるのは気がひけるという世代なのである。(赤川次郎『三毛猫ホームズの幽霊城主』 角川書店 1992)

④午前の休憩は十時十五分から半までの十五分間だ。ベルト・コンベヤーが止まり、男の工員たちは灰皿代わりの石油缶の周りに集まって一斉に煙草を吸い始める。女の工員たちは北側の窓の外、おどろ棚の下に据えた木のベンチに腰を下ろしてお喋りをする。ほくと白井は、おばはんたちの仲間に入るのは気がひけたので、石油缶近くの段ボール箱に並んで腰を下ろした。(芦原すなお『青春デンドケデケデケ』 河出書房 1992)

⑤乃理子は私服というものをほとんど持っていない。入試の席が、いかにも東京っ子らしい、あかぬけた女の子の隣だった時はさすがに気がひけたが、洋服ぐらいはもうじきどうにでもなるような気がする。(林真理子『葡萄が目にしみる』 角川書店 1992)

⑥杭州の竹林に来て八月のめまいのような蝉の声聞く／以前、中国に行った時の歌である。蝉時雨とはよく言ったものだなあとつくづく思った。が、昔の人の表現を、そのまま借用するのは気がひける。そこで「目まいのような」という比喩で表してみた。(俵万智『短歌をよむ』 岩波書店 1997)

⑦だが、一週間経っても、山崎麻美からは何の連絡もなかった。青山は吉川の言い分けを守り、さらに一週間待った。吉川の意見というより、男としてすぐに電話をするのは気が引けたのが本当のところだったが、その間、青山は山崎麻美のことばかり考え、会社の部下からも、重彦からも、リエさんからも、「どこか、からだがおかしいのか?」と言われた。三キロ、体重が減った。(村上 龍『オーディション』 幻冬舎 1997)

⑧「野田の同僚? そうですか」「実は……妙なことをお訊きするので、気がひけますけれど——」「言ってみて下さい」と男は言って、「ああ、僕は狩谷といいます。野田とは大学が同じで、僕は大学の講師をしているんです」(赤川次郎『呪いの花園―幻影稼業』 集英社 1998)

⑨せつないという感情の最初の記憶は『泣いた赤おに』だった。(中略) 浜田廣介の代表作を今さら説明するのも気がひけるのだが、人間の友達がほしいと思った赤おにが、家(それは木造のつましい日本家屋なのだが)の前に立て札(この言葉を覚えたのもこの本によってだった)をたてるところから、物語は始まる。(江國香織『都の子』 集英社 1998)

⑩果歩は映画の題名を言い、主役が誰で相手が誰、ストーリーがどうで映像がどう、と、静江の相槌にみちびかれるままに説明した。本当のことをいえば映画はさっぱりおもしろくなかったし、事務所の電話に切り替えたとはいえ、仕事にそんな話をするのも気がひけたが、そういう気持ちとはうらはらに、説明しながらどんどん、自分でも困惑するほど声がいきいきしていく。(江國香織『ホリー・ガーデン』 新潮社 1998)

⑪午後九時すぎ、凜一は千迅の車で自宅へ戻った。正午の両親は、凜一が予約しておいた近くのホテルへ泊まる。正午は鎮静剤で睡りに就き、週明けに精しい検査が行われることになった。「凜一もずいぶん気がまわるようになったじゃないか。家元の留守宅へ泊まるなんてのは、いくら親族でも気が引けるからな」原岡家の門口で凜一を降ろした千迅は、そのまま車を出そうとした。(長野まゆみ『彼等』 集英社 2000)

⑫「離婚するってどんな気持ちのもの？」そよちゃんは鍋をみたまま少しだけ考えて、それから微笑を含んだ声でおっとり、「そうねえ、半殺しにされたままの状態で旅に出るような気持ち、かしら」と言う。おどろいた。私もしま子ちゃんも、しばらく黙ってしまったほどだ。「ハンゴロシ」普通の声で言うのは気がひけて、私は小声でつぶやいた。(江國香織『流しの下の子』 新潮社 2000)

3.1.2 意味

①～⑫の用例に共通するのは、自らの言動を抑制しようとしている状態を示していることである。それらの原因として“世間一般の常識から逸脱しているという現在の意識”があげられる。その意識を具体的にあげると以下ようになる。

- ①毎朝夕と一緒に家の近くに散歩に行くことを友達の前で得々と話して聞かせること
- ②高校二年でありながらディズニー漫画のキャラクターつきの洋服ダンスを子供っぽく使い続けること
- ③身内のことを非常に賞めること
- ④男である自分達がおばはんたちの仲間に入ること
- ⑤私服をほとんど持っていないため入試に洋服を着ていけないこと
- ⑥蟬時雨という昔の人の表現を自分の短歌にそのまま借用すること
- ⑦男として女性に対してすぐに電話をすること
- ⑧相手に妙なことを聞くこと
- ⑨浜田廣介の代表作を今さら説明すること

⑩仕事中に電話で映画の話をすること

⑪家元の留守宅に泊まること

⑫「ハンゴロシ」という過激な言葉を普通の声で言うこと

これらの逸脱意識の背景にある「世間一般の常識」すなわち行動規範はそれぞれ次のものが想定される。

①父親という身内の人間と近場に散歩に行く程度のことを得々と他人に話すべきでない

②高校二年ともなるとディズニー漫画のキャラクターつきの洋服ダンスは卒業すべきだ

③身内のことを他人の前で賞めたりすべきでない

④男は気安く女の仲間に入っていくべきでない

⑤入試には普通私服を着ていくものだ

⑥他人が既に用いた表現を自分の短歌の中にそのまま借用すべきでない

⑦男は女に気安く電話をすべきでない

⑧親しくもない相手におしつけに妙なことを聞くべきでない

⑨有名作家の代表作をことさら読者に説明する必要はない（読者への不敬になる）

⑩仕事中に電話で映画の話をすべきでない

⑪他者の留守宅に泊まるべきでない

⑫不快な言葉を人前で平然と口にすべきでない

以上、“自らの言動を抑制しようとしている状態”の原因として特徴的なのは、人間関係にかかわるものが多い点である。11例のうち②⑤⑩以外の9例が、他者との付き合い方についての行動規範を前提にした意識を“気が引ける”という心理状態の原因として持っている。②⑤は人間関係そのものと言うよりも衣服に関する“社会常識”ではあるが、人間生活の基本にかかわる「衣」についての“常識”である点で、また、⑩も仕事の心構えに関する“社会常識”ではあるが、人間生活の基本にかかわる「労働」についての“常識”である点で、“人間にかかわる常識に対する逸脱意識”を原因としており、その点では他の9例と共通点を持つ。「気が引ける」の意味の一つとして、“主として人間関係にかかわる世間一般の常識から逸脱しているという現在の意識が原因となって、自らの言動を抑制しようとしている状態を示す”点があげられよう。

3.2 意味II

3.2.1 用 例

①なまじ亜衣がやたら可愛かったりするから、ますます気がひけるしまうのだ。狙っている奴なら学校にごまんといえるし。（若木未生『ハイスクール・オーラバスター』）

集英社 1990)

②一方にはラフカディオ・ハーンとフュー・フレイザー夫人がいる。また他方にはアーネスト・サトウ氏とチェンバレン教授がいる。そのはざまで、しかも英語で日本のことを私が書くということは、まったく気がひける思いがする。(新渡戸稲造『武士道』三笠書房 1999)

③最初には書きためた詩や日記を載せていた。半年たって軽い気持ちで自分の写真を載せ始めたころ、アクセスが急増。ネットアイドルのランキングやコンテスト主催者から参加依頼のメールが来るようになり、あつという間に有名になった。「どうしようって思った。ネットアイドルはモデルやレースクイーンが多いけど、私はそういうタイプじゃない。アイドルと名乗るのは気が引ける。」だが全国に友達が増え、取材で東京に旅行するなど、刺激的な経験をして、楽しくなってきた。(『中国新聞』 中国新聞社 2000)

④他人の言葉遣いの誤りや下手な文章を指摘するのは、はなはだ気の引けるものである。とかく、煩い奴だと思われはしないか、と恐れたり、野暮だ、大人気ないと遠慮したりするのが常であるが、それよりもっと大きな原因は、他人の事は言えない、自分はどうかという反省が伴うからである。(青木一雄『話上手』 実業之日本社 2000)

3.2.2 意味

①～④に共通するのは、積極的な言動を逡巡し遠慮している状態を示していることである。それらの原因として“自己の実力からして分不相応であるという現在の意識”があげられる。その“意識”を具体的にあげると以下になる。

- ①やたら可愛かったりする亜衣と交際しようとする事
- ②英語関係の有名人のはざまでしかも英語で日本のことを自分が書こうとする事
- ③にわかに有名になってしまった自分がアイドルと名乗ろうとする事
- ④自分のことは棚に上げ他人の言葉遣いの誤りや下手な文章を指摘しようとする事

以上、“積極的な言動を逡巡し遠慮している状態”の原因として特徴的なのは、意味Ⅰと同様に人間関係にかかわるものが多いという点である。①②③④は、それぞれ「亜衣」「英語関係の有名人」「ネットアイドル」「他人」と“気が引ける”の主体との実力に基づく相対的な力関係を媒介とした人間関係を“気が引ける”という心理状態の原因として持っている。「気が引ける」の意味の一つとして、“主として人間関係にかかわる自己の実力からして分不相応であるという現在の意識が原因となって、積極的な言動を逡巡し遠慮している状態を示す”点があげられよう。

3.3 意味Ⅲ

3.3.1 用 例

- ①上機嫌な、高木の笑い声が聞こえた。誘われるように哲造も微笑した。疲れがほぐれていくようであった。「元気か」高木がたずねた。「ああ、元気だよ」「元気といったところで、どうせお前はピンシヤンと生きのいい顔をしていないだろう？病院の方はどうだ？」「うむ。お陰様で、はやりすぎているよ」「お陰様は、よかったな。医者や坊主のはやるっていうのは、どうも気が汚ける話だ」(三浦綾子『氷点』 角川書店 1985)
- ②ガラスを切って入るのは簡単だが、何も盗む気がないのに、そんな真似をするのも気がひける。(赤川次郎『待てばカイロの盗みあり』 徳間書店 1985)
- ③確かに毎回記録したほうが、いくら持ち出したかがわかるし、店をやっていく励みにもなるかもしれない。だがたとえ紙片でも、こう改まって書かれると、何か他人行儀な感じになる。貸す者と借りる者と、これでは貸借関係で成立しているようなものである。「いいから、引っ込めなさい」「でも、とっておいて下さい」霧子が赤いマニキュアを塗った指先で、紙片を押し返す。「わざわざ、こんなことをしなくてもいいのよ」「でもこうしたほうが、頼みやすいんです」どうやら霧子は、毎月、金を無心するのに気が引けて、借用証を提出することにしたようである。(渡辺淳一『化身』 集英社 1986)
- ④「あら、いいじゃない。ずっとタダで置いてくれるんでしょ？」と、経済的メリットから喜んで一緒に来ることになった。しかし、片山としては、石津までついてきたので、多少気が引けていた。あとで食事を請求したらどうでしょう？「この寮に残っている生徒は、ここにいる五人で全部です。」と、三宅久美は言った。(赤川次郎『三毛猫ホームズのクリスマス』 角川書店 1988)
- ⑤淑女として、そんなはしたないことはしたくないと思っていたのだ。だがスチュアートは罪を感じて、彼女といっしょにいと気がひけた。(ミッチェル／大久保康雄・竹内道之助訳『風と共に去りぬ』 新潮社 1995)
- ⑥「これから少しづつ状況が変わってくるさ。俺は学校へ通うようになるし、君はもっと歌うようになる。こども悪くはないが、少し狭すぎるよ。木工細工をしたくてもなんとなく気がひける。」(テリー・マクミラン／松井みどり訳『えくぼを消さないで』 新潮社 1997)
- ⑦何だか口振りが愉しそうだったし、そんなことで話に水を注すのも気が引けたからだ。(京極夏彦『塗仏の宴－宴の支度－』 講談社 1998)
- ⑧コップの水も空である。私達はそれぞれ珈琲を一杯ずつ注文しただけだったから、少々気が汚けて蜜豆を追加で注文した。(京極夏彦『塗仏の宴－宴の支度－』 講談社 1998)
- ⑨翌日、袁皇后は思いきって徽音殿に潘淑妃を呼び付けた。緊張した表情であらわれた潘淑妃に、笑顔をつくって話しかける。「じつはあなたにおねがいがありますの」「皇后

さまが妾に？いったい何ごとでございましょう」「妾の実家が裕福でないことはご存じですね。いつも万歳爺に援助をおねがいしているのだけど、また三十万銭ほど必要になってしまったのですよ。でも先日も万歳爺さまにおねがいたばかりなので、気がひけるのです」「まあ、それはそれは……」（田中芳樹『黄土の虹 祥伝社 2000）

⑩今から一時間ほど前、八牧は八人の人間が自分のすぐ近くを通っていくのを見送っていた。自分から手を出す気など毛頭ない。これが緊急補縛部隊の訓練であるなら、八牧にとっても人間に見付からないように潜伏するための訓練なのだ。勇樹に嘘をつかせたことには少しだけ気が引けたが、それは本当に少しだけだった。（中村恵里加『ダブルブリッドⅥ』 電撃文庫 2001）

⑪去年、現役合格が出来なかった私は、予備校に通っている。現役時代は塾や予備校をあまり利用しなかったが、浪人になり夏季講習などを受けて驚いた。授業料の高さである。浪人させてもらい、その上に高い授業料を親に出してもらうのは気が引けた。（『朝日新聞』 朝日新聞社 2001）

⑫（浅見一）浅見は「あっ」と声に出した。（浅見夏子か一）文瀬夏子では分らなかったが、浅見夏子なら知っている。夏子は浅見の初恋の相手であった。もっとも、「初恋」といっても小学五年の頃の話で、淡い一というのも気がひけるほど、幼い思い出しかない。しかしあれはたしかに僕の初恋だったにちがいない。一と浅見は思う。浅見が学級委員で夏子は書記を務めていた。（内田康夫『鏡の女』 角川書店 1990）

⑬「叔父さん、僕、今日モーターを運転したんだぜ。」「モーターだって？玩具のかい？」「馬鹿いつてらあ。本物さあ。本物のモーターを運転したんだよ。」「ほう。えらいもんだね。いったい、なんのモーターだい？」こう聞かれると、実はお豆腐屋のモーターさ、と答えるのは、どうも気が引けます。（吉野源三郎『君たちはどう生きるか』 岩波書店 1991）

⑭ある文章教室で「正確な文章」を書くことの難しさについて話をしました。そのときこんな実験をしてみました。教室にいた方がたに無断でこの話を書くのは気がひけますが、許してください。（辰濃和男『文章の書き方』 岩波書店 1994）

⑮電話が鳴った。このごろ友だちとはほとんどEメールでやり合っているの、電話してくるやつは緊急の用件だけというのがほとんどだ。電話は、いないときもあるし、出たくないときもある。用件が終わったからと言っても自分勝手に切るのも気が引ける。（宗田 理『はくらのラストサマー』 角川書店 1999）

⑯「何ですか」「五十万入っている。印税の前払いだと思ってくれればいい。事務所を辞めるとなれば、収入も途絶えるわけだし、いろいろと困るだろう」「私、貯金ぐらい持ってます」「いいんだ。どうせ本になったら渡すお金なんだ。少し前に貰っておいたからって気にすることはない。これは会社としての投資みたいなものなんだから」そうまで言われると気がひけた。流実子はそれを手にした。「じゃあ、頂いてお

きます。本当言うと、助かります。」「中に領収書が入っている。それにサインだけしてくれないか。経理の方に回さなければならぬ」(唯川 恵『恋人たちの誤算』新潮社 2001)

⑰そのために、一はこの軽井沢にやってきたのである。とはいえ、想像の域を出ない今の段階で、証拠集めのためとはいえ簡単に研太郎たちに事情を話すことは、さすがにためられた。せっかく、級友が会いに来たと思ってただただ歓迎してくれる彼らに、訪問の目的をさっさと話してしまうのも気が引ける。(天樹征丸『金田一少年の事件簿邪宗館殺人事件』講談社 2001)

3.3.2 意味

①～⑰に共通するのは、自らの言動を道理に照らして抑制しようとしている状態を示していることである。

この中で、①～⑪は原因として“相手に損害を与えるという現在の罪の意識”があげられる。その意識を具体的にあげると以下ようになる。

- ①病気や悩みをかかえている人に経済的負担を強めていること
- ②ガラスを切って家宅侵入すること
- ③毎月、金を無心すること
- ④自分だけでなく石津の分まで経済的負担をかけること
- ⑤淑女の彼女にはしたくないことをさせてしまった上で一緒にいること
- ⑥狭い部屋で木工細工をして相手に迷惑をかけること
- ⑦愉しそうにしている相手の話に水をさすこと
- ⑧珈琲一杯ずつを注文するだけで長居をすること
- ⑨万歳爺に何度も経済的援助をお願いすること
- ⑩勇樹に嘘をつかせたこと
- ⑪親に浪人させてもらった上に予備校の高い授業料を出してもらうこと

⑫～⑰は原因として“相手との信頼関係を損ねるという現在の罪の意識”があげられる。その意識を具体的にあげると以下ようになる。

- ⑫自分の「初恋」が幼い思い出でしかなく‘淡い’と言っても嘘になること
- ⑬実は豆腐屋のモーターであると答えるのは嘘をついたことになること
- ⑭無断で実験の話を書くことが教室にいた人々を出し抜くことになること
- ⑮用件が終わった後電話を自分勝手に切ると相手に対して不敬になること
- ⑯本の印税としての五十万の前払いの申し出を断ると相手の好意を無視することになること
- ⑰級友が会いに来たと思って歓迎してくれている研太郎たちに、証拠集めという訪問の目的をさっさと話してしまうと相手の好意を無視することになること

以上、“自らの言動を道理に照らして抑制しようとしている状態”の原因として特徴的なのは、意味Ⅰ・Ⅱと同様にいずれも人間関係にかかわるという点である。「気が引ける」の意味の一つとして、“相手に損害を与えるあるいは相手との信頼関係を損ねるという現在の罪の意識が原因となって、自らの言動を道理に照らして抑制しようとしている状態を示す”点があげられよう。

3.4 用法

3.4.1 文型

文型に関しては、「ダレダレは——。」となる。“ダレダレ”は基本的に1人称となる。過去形の場合（意味Ⅰの⑦⑩、意味Ⅲの③④⑤⑬）は3人称も可能である。「気が引ける」の直前に“〈動詞〉+の”は（意味Ⅰの③④⑥⑦⑪⑫、意味Ⅱの③④、意味Ⅲの①⑪⑬⑭）が使われることが多い。「の」の代わりに「こと」を使い、“〈動詞〉+ことは（意味Ⅱの②）”となることもある。また、“時は（意味Ⅰの⑤）”“時には（意味Ⅰの②）”となることもある。“〈動詞〉+のも”（意味Ⅰの⑨⑩、意味Ⅲの②⑦⑫⑮⑰）が使われることも比較的多い。その他、“のに（意味Ⅲの③）”“には（意味Ⅰの①、意味Ⅲの⑩）”となることもある。これらはいずれも、格助詞を構成要素として持つ（代用及び省略される場合もある）文型であり、「気が引ける」という心理状態の対象を節の形式で示している。一方、“ので（意味Ⅰの⑧、意味Ⅲの④⑨）”“から（意味Ⅱの①、意味Ⅲの⑧）”“と（意味Ⅲの⑤⑬）”のように、接続助詞を構成要素に持つ文型による理由説明が入る場合もある。心理状態の対象も理由説明も文脈に委ねて省略してしまう場合（意味Ⅲの⑥）もある。また、直前に連用修飾語として、“何か”“どうも”“なんとなく”といった漠然とした様子を示す表現や“ますます”“まったく”“はなはだ”“多少”“少々”“少しだけ”といった程度を示す表現が少なからず使用される。直後に逆接の接続助詞を用いて、「気が引ける」と言いながら実際は自らの言動を遂行することを表現する場合（意味Ⅲの⑭）がある。その際、「気が引ける」程度が大きい場合は何らかの正当な理由付けが行なわれる。また、程度が小さい場合は「…するのは気が引けるが…」という表現自体が形式的な一種の婉曲表現となり、自己の意志による言動が相手に不快感を与えることを可能な限り未然に防ぐ機能を持つことになる。

3.4.2 文法

文法に関しては以下のような表現は可能である。

連用修飾を受けうる 少々気が引ける／まったく気が引ける

連体修飾句に立ちうる 気が引ける思い／気が引ける話

しかしながら、連体修飾句の用例は例外的なものであり、自由度が高いとは言えない。また、以下のように制約が多い点には注意が必要である。

連体修飾は受けえない

*私の気が引ける

句中に連用修飾語を挿入しえない

*気が非常に引ける

否定の表現は一般的でない

*気が引けない

名詞句に転換しえない

*気引け

4. 「気が引ける」の意味用法

以上の考察結果に基づき、ここでは「気が引ける」の意味用法をまとめておくことにする。

〈意味〉

意味は三つに大別することができる。第一に、自らの言動を抑制しようとしている状態を示す。その原因としては、“世間一般の常識から逸脱しているという現在の意識”をあげることができる。第二に、積極的な言動を逡巡し逡慮している状態を示す。原因としては、“自己の実力からして分不相応であるという現在の意識”があげられる。第三に、自らの言動を道理に照らして抑制しようとしている状態を示す。原因としては、“相手に損害を与えるあるいは相手との信頼関係を損ねるという現在の罪の意識”があげられる。以上の心理状態及びその原因は、複合する場合もある。特に、心理状態に関しては、自己の言動を逡巡し差し控えざるをえない状態とまとめることも可能である。また、原因に関しては、人間関係にかかわる状況であることが多い点を指摘することができる。

〈文型〉

「ダレダレは+ (A) + (B) + ——。」

Aには“…のは”“…のも”“…のに”“…には”のように格助詞を用いて「気が引ける」という心理状態の対象を示す表現が使用されたり、“…ので”“…から”“…と”のように接続助詞を用いて理由を説明する表現が使用される場合が多い。また、Bには連用修飾語として“どうも”“何か”“なんとなく”のように漠然とした様子を示す表現や“甚だ”“まったく”“たいそう”“ますます”“少々”“多少”“少し”のように程度を示す表現が少なからず使用される。「ダレダレ」は基本的に1人称である。

〈文法〉

連体修飾は、「少々気が引ける」「甚だ気が引ける」のように受けることが可能である。「気が引ける思い」「気が引ける話」のように連体修飾句に立つことも可能である。ほとんど文の述部として使用され、否定形は一般的でない。過去形は可能であるが、連体修飾、句中への連用修飾語の挿入、名詞句への転換などはできず、文法面で比較的制約が多い。

5. おわりに

本稿では動詞性の「気」の慣用表現として「気が引ける」を取り上げたが、現代（1968～2001）の実際の用例を通して、意味として三つがありそれぞれの感情には独自の原因があること、また、その原因の共通点が人間関係にかかわる場合が多いことが明らかになった。今後は、「気が引ける」と類犠牲の高い「気が咎める」「気が差す」「気が臆する」という逡巡の表現、「気が悪い」という形容詞・形容動詞性の感情表現、「気にする」「気になる」「気にかかる」「気が痛む」「気に病む」「気で気を病む」「気が落ちる」「気が落ち込む」「気が挫ける」「気が沈む」「気が滅入る」「気が鬱する」「気がふさぐ」「気が腐る」「気が詰まる」「気がせく」「気が揉める」「気も漫ろだ」などの表現の考察を課題としたい。

【参考文献】

- 木村 敏（1972）『人と人との間―精神病理学的日本論―』 弘文堂
星野 命（1976）『身体語彙による表現』『日本語講座 4 日本語の語彙と表現』 大修館書店
宮地 裕（1982）『慣用句の意味と用法』 明治書院
中村 明（1993）『感情表現辞典』 東京堂出版
戸田利彦（1994-1998）「日本語慣用表現に関する研究（Ⅰ）－（Ⅴ）」『教育学研究紀要』 第40巻-44
第2部 中国四国教育学会